

《研究ノート》

大規模災害における高齢者の健康と  
ソーシャル・キャピタルのあり方に関する研究

—熊本地震における益城町P地区を事例として—

茶屋道 拓哉<sup>1)</sup> 福本 久美子<sup>2)</sup> 福田 久美子<sup>2)</sup>

1) 鹿児島国際大学福祉社会学部社会福祉学科

2) 九州看護福祉大学看護福祉学部看護学科

# 大規模災害における高齢者の健康と ソーシャル・キャピタルのあり方に関する研究 —熊本地震における益城町P地区を事例として—

茶屋道 拓哉<sup>1)</sup> 福本 久美子<sup>2)</sup> 福田 久美子<sup>2)</sup>

1) 鹿児島国際大学福祉社会学部社会福祉学科

2) 九州看護福祉大学看護福祉学部看護学科

和文抄録：本研究は、大規模災害によって生じた健康被害について、地域に存在するソーシャル・キャピタル（以下、SCとする）がどのように機能し、住民（特に高齢者）の健康に寄与したかについて検証したものである。2016年の熊本地震において甚大な被害の発生した熊本県上益城郡益城町P地区において、フィールドワークや被災した高齢者が作った互助サークルメンバーに対するグループインタビューを行った。分析の結果、①被災後の健康状態悪化、②被災直後におけるSCの素地を基盤とした互助、③SCの素地となった地区活動や宮ごもり、④良質なSCへと発展するグループ活動、⑤受容的かつ自由な雰囲気が生み出す好循環、⑥グループの利益を地域の利益へつなげる、といった事項について整理・集約された。P地区では「SCの素地」によって良質なSCが生まれ、展開がなされていた。一時的に低下した高齢者の健康状態であったが、良質なSCが生み出した精神的安定や生きがいによって補完され、活発な互助活動が展開されている好循環が明らかになった。

キーワード：ソーシャル・キャピタル グループインタビュー 互助 熊本地震

## 1. 緒言

近年、わが国では大規模な地震・火山噴火・集中豪雨などによる災害が多発し、多くの死傷者や被災者を生み出している。災害発生後、行政機関が機能するまでの約72時間は、全ての被災者が自助や互助によって生命を守ら必要がある。さらに、高齢者などの「要配慮者」<sup>\*1)</sup>は、支援の情報などが届きにくく、一層の困難に陥ることになる。

このような中、良好なソーシャル・キャピタル（以下「SC」と表記）<sup>\*2)</sup>が存在すると、地域の互助機能が十分に発揮され、72時間を生きぬくことができるとされている。また、復旧復興の過程でも、良好なSCの存在が精神的な健康を維持し、災害前のくらしの再建に役立つことも報告されている<sup>1) 2)</sup>。

災害復興における良好なSCは重要な社会資源と言える。一方、災害前の時点ですでに社会の辺縁に置かれた人は、強いSCを持つグループによってさらに社会から取り残され、再建の輪から外され、その復興が遅れるとも言われている<sup>2)</sup>。つまり、個人とSCの関係性や地域のSCのありようが、災害によって明らかになり、復興過程ではくらしの再建に影響し、災害前のくらしに戻りにくくなり、健康の格差が拡大することになることもある。

## 2. 本研究の目的

本研究では、熊本地震<sup>※3</sup>という大規模な災害が高齢者の健康とSCにどのような影響を与えたのかに着目する。個別具体的な被災地域の実情を調査し、災害前の個人と地域のSCのあり方が被災した高齢者の生活にどのように影響を与えているのか、どのようなSCのあり方がより健康な暮らしをもたらすのかについて明らかにし、自然災害発生時における互助のあり方について今後の示唆を得ることとする。

## 3. 研究の対象

今回の研究では広範囲な地域や人を対象とするのではなく、研究者らが従前より保有していたネットワークをもとに選定した地域（熊本県上益城郡益城町P地区）を対象に調査を行うこととした。熊本地震を経験した対象地区でグループ活動に参加している住民（高齢者12名。地区の代表に対して研究計画について事前説明による協力依頼を行った。その後、地区の代表とともに機縁法により対象者を抽出した）を対象とした。

## 4. 研究の方法

研究の方法は既存資料の収集と整理、研究者らによるフィールドワーク、グループインタビューとした。グループインタビューの骨子は①属性（年齢・地震前後の家族構成や住まいの状況、被害状況などは調査票に記入）、②熊本地震時の状況について、③地域のつながりと熊本地震前後の住民のつながりの変化について、④ソーシャル・キャピタルが復興にもたらした影響について、⑤熊本地震を体験して感じていること、⑥その他、とした。調査の実施期間は2018年12月であり、グループインタビューに使用した時間は約90分であった。調査対象者の概要は表1のとおりである。

グループインタビューによって得られた音声は逐語記録としてデータ化し、対象者が語っている内容の意味を解釈しながらデータを読み込んだ。分析焦点を研究の目的に沿って①被災後の健康状態、②被災直後の地域における互助、③P地区におけるSCの素地、④互助サークルの取り組み、の4つに設定し、目的に沿ったデータを抽出しつつその整理を行い、フィールド調査とともに得られた知見を総括した。一般的に質的研究では逐語記録を切片化し、解釈を深めながら帰納法的な分析とともに構造化や概念化を試みる方法やコーディングなどによってデータを的確に表すコードを集約しつつカテゴライズする方法などが散見される。しかし、本研究ではごく限られた一つの地域における個別的な経験や活動取り組みの分析であるため、住民一人ひとりの語りを可能な限り分断することなく、最小限の整理にとどめた。被災した高齢者の語りの価値を残しつつ、この地域のSCに関する醸成の由来やSCを基にしたグループ活動の展開と復興プロセスを関連付けて考える事とした。



表1 調査対象者の概要

氏名	年齢	性別	家族構成	地震による 住まいの状況	仮設住宅入居期間
A氏	60代後半	女	夫、子、本人	全壊	1年8か月
B氏	70代前半	女	本人	全壊	2年2か月
C氏	80代前半	女	子、子の配偶者、孫（2人）、本人	全壊	6か月
D氏	70代前半	女	夫、本人	一部損壊	-
E氏	70代後半	女	子、子の配偶者、孫（2人）、本人	全壊	2年
F氏	70代後半	女	子、子の配偶者、孫、本人	半壊	6か月
G氏	70代後半	女	夫、子（2人）、本人	全壊	1年3か月
H氏	60代後半	女	夫、本人	大規模半壊	-
I氏	80代前半	女	夫、本人	全壊	1年1か月
J氏	60代後半	女	夫、子（2人）、本人	全壊	-
K氏	70代前半	女	夫、本人	全壊	-
L氏	70代前半	女	母、本人	全壊	1年3か月

## 5. 倫理的配慮

調査対象地区の代表および調査対象者に対し、事前に文書において研究の趣旨、方法、グループインタビューの内容を送付した。調査に当たっては、調査対象者に口頭で研究の主旨や目的、方法について説明した。また、拒否権・選択権があり、途中でやめても不利益を被ることはないこと、得られた情報は研究目的以外には使用しないこと、そのための個人情報保護の方法や研究中および研究終了後の対応方法などを説明した。さらに、インタビュー中における精神的苦痛発生時の対応についても説明を行った。同意書を作成し、調査対象者・研究者が署名・捺印した。これらの手続きを経てグループインタビューを実施した。インタビューはグループ全体のコミュニケーションについて安全とプライバシーが確保できる場所で実施した。

なお、本調査は、九州看護福祉大学倫理委員会による倫理審査を受け、その承認（受付番号30-016：2018年10月26日付承認）を得た後に実施している。

## 6. 利益相反

この研究は、日本学術振興会科学研究費助成（基盤C・課題番号18K10632：平成30～令和3年度）によって行い、研究の公平性に影響を及ぼす利害関係はない。

## 7. 結果

### 1) 対象地域の特徴

本研究の対象地域は熊本県上益城郡益城町P地区である。益城町は、熊本県中部（熊本市の東部）に位置し（図1）、人口33,000人ほどの町である。高速道路のIC、空港を有し、交通の利便性に優れた町で、熊本市のベッドタウンとしての機能を担っている。また畑作や水田による稲作といった農業が盛んな地域である。

2016（平成28）年4月14日と16日に起こった熊本地震では、前震・本震とも最大震度7を記録している。被害状況は、人的被害（直接死20名、震災関連死25名、重傷135名）、住家被害（全壊3,026棟、大規模半壊・半壊3,233棟、一部損壊4,325棟、合計10,584棟）、避難者数（10避難所16,050人）と町内全体に甚大な被害をもたらされた<sup>3)</sup>。熊本地震前後では、人口が約1,500人減少、世帯数も約500世帯減少したものの、その後徐々に増加傾向がみられている（表2）。なお、熊本地震以前のP地区の人口については約400人、世帯数は140ほどであった。

こちらも熊本地震によって若干の減少、その後の回復が見られている。



図1 対象地域（熊本県上益城郡益城町）の位置

益城町では各地で熊本地震からの復興に向けた様々な取り組みが行われている。調査対象となったP地区においても特徴的な取り組みがされている。例えば、地域の高齢者たちによって自然発生的に立ち上げられたサークル活動（互助サークルQ）や消防団員や地域住民による互助・復興を促進するための組織（Wグループ）など積極的に復興に向けた自主的な取り組みが行われてきた。

表2 益城町の人口・世帯数の推移

	平成28年3月	平成29年3月	平成30年3月	平成31年3月	令和2年3月	
人口(人)	男性	16,553	15,866	15,893	15,839	15,978
	女性	17,946	17,135	17,059	16,998	17,150
	合計	34,499	33,001	32,952	32,837	33,128
世帯数	13,455	12,945	13,061	13,214	13,482	

益城町行政区別人口表（平成28～令和2年）より筆者作成

## 2) グループインタビュー調査結果の概要

グループインタビューによって得られた音声データを逐語記録化とし、研究者らによって分析焦点とした事項（①被災後の健康状態、②被災直後の地域における互助、③P地区におけるSCの素地、④互助サークルの取り組み）について、「語り」の整理を行った。次に①～④の内容について、それらの語りの意味を適切に表現するキーワードに置き換えて項目を再設定した。整理のプロセスの中で、「④互助サークルの取り組み」については、複数の知見が得られたため、ここではそれをさらに細分化して示している（④～⑥）。

また、ここに示す逐語記録は可能な限り発言者の発した内容をそのまま示している。ただし、方言の修正（一部はそのまま）や文脈に影響を与えないほどの微細な修正、プライバシーを保護するための修正は行っている。なお、整理・キーワードの設定を行う際の中心となった文言に下線をし、（ ）内に研究者らによる文言の補足を行った。

### ①被災後の健康状態悪化

被災後の健康状態に関して調査対象者から語られた内容は、短期的な健康被害として挙げられた身体的外傷や疾患（語り5、7）だけにとどまらず、中長期的な健康被害として持病の悪化（例：糖尿病の悪化）や内科疾患の悪化（語り6、7）、健康維持のための適切な食事摂取が困難なケース（語り8、9）など多様であった。また、メンタルヘルス上の健康障害として、診断はされていないもののASD（急性ストレス障害）やPTSD（心的外傷後ストレス障害）様の症状、職を失ったこと（環境や経済状況の急激な変化）によるうつ状態を伴うひきこもりといった精神的な健康状態の悪化についても語られている（語り1～3）。



語り1：音がしたり、地響きがしたりすると、もう夜中に何回も起きてですね。目が覚めたり。自分ではしっかりしているつもりでも、体重が10キロぐらい落ちました。

語り2：気持ちの上でパニック症候群っていうんでしょうか。地震（余震）がある度、NHKの緊急放送で「チャラリン！チャラリン！チャラリン！」っていうあれを聞く度にもう動悸がするんですね。もうなんか「ドキドキドキドキ〜」って怖くて、そういう状態がずっと続きました。

語り3：介護の仕事ですけど、それも無くなって。もう、家もどうなるんだろうって。本当、なんか…なんなんだろうって感じで。先が見えない。家に引きこもってましたもんね。しばらく。

語り4：主人は木工が趣味で小屋の2階を木工の部屋、遊び場にしてたんですね。そういうものも崩れてしまったから全然できなくなって。最近はそのせいばかりじゃないでしょうけど。80歳過ぎたので。なんか物忘れがひどくて。毎日会う人の名前はどうか覚えてますけど、近所の人の名前は忘れてます。顔は見たことあるけど、「名前がわからん。家もわからん。私はどの家かい」って。毎日教えないといけないんですね。

語り5：（避難するとき）ドーンと転んで。側溝の中にお尻を挟み込まれて。今度はそこから出れないんですよ。（息子が）「なんぼしよっとか、なんぼしよっとか」て言い寄るけど、すんなり出られないわけですね。慌ててはいるけど余震はくるし。なんとかそこから出て外に避難して、車の中に避難しました。お尻はその時はとても痛かったと思うんですが、あんまり記憶がありません。（内出血が治るのに）1か月かかりました。

語り6：（車中泊時に）肺炎みたいになって、夜中に咳するんですよ。咳が収まらなくて、咳をしずめようと思って、ガラスがいっぱい落ちてる中（被災した自宅）を運動靴で上がって薬を探すんですけど無くて。やっと1錠あったんですよ。それを飲んでその夜は主人に怒られながら。「咳すると僕にうつる」とか言って怒るんですよ。同じ車の中だから。

語り7：（避難所で巡回してきた医師や看護師に）すぐに点滴してもらって。1か月くらいはずっと咳が続きました。身体はもうなんていうか弱っていくっていうような感じでした。やっとかかりつけの病院に行き始めてから、先生が栄養剤とかを点滴してくださって、元気になったんですけど。その後の片づけで足をやられて。手術をしなきゃいけないような状態に今はなってます。

語り8：3週間入院したんですよ。糖尿病が悪化して。食事で野菜が無くて。弁当とパンでしょ。もうあれで乱れてしまって。

語り9：（避難時の炊き出しなどで）時間的に農業をしている関係で、朝ご飯が9時って言われてもどうしようもないから。まあ、常に小学校（避難所）の隣にコンビニがあるから、コンビニに行って、野菜ジュースとかを買ってとか。非常にそういう面は注意してたかな。食生活は注意した。

## ②被災直後におけるSCの素地を基盤とした互助

二度の震度7を経験した対象地域では、前震および本震直後に各住居からの避難や倒壊（全壊や半壊）した住居から脱出する際の状況に関する語り（例：近隣（近所に住む家族）との助け合いによって生命をつないだ語りなど）も見受けられた（語り10、11）。また、避難所などが開設される前段階までのいわゆるフェーズ0

(地震発生直後)～フェーズ1(地震発生から72時間)における地域での互助の実態が明らかになっている(語り11～16)。特にP地区では従来から存在していた消防団が早期に機能し、声掛け(安否確認)や炊き出しなどの重要な役割(目に見える支援)を担っていたことが分かる(語り17～20)。

語り10：外から(近所に住む)息子が懐中電灯で照らしながら呼んでくれて。なんか、ふっと正気に戻った感じで。「なんとか大丈夫!出れないよ。」って言ったら、窓ガラスをドーンっと蹴破ってくれて。「ここからー!」っていう感じで。やっと外から引っ張り出してもらって。でもなんかガラスがいっぱい割れてるから、ひっかき傷みたいに。靴下も履いてない状態でやっと外に出ました。

語り11：(自分が家の外に出た後に)「隣はどうしてるかな」って思って隣に行っ。隣はまだ、4か月くらいの赤ちゃんがいて。それと病人の爺ちゃん。爺ちゃんって言ってもまだ60くらい。赤ちゃんを「中から出せ」、「出していいよ」って、そういう声掛けをしたのをなんか覚えてるんですね。

語り12：1人だし、「もう、どうしよう」っていう感じでいたら、隣近所の人たちが来てくれて。隣に弟がいるので弟も来てくれて。(水道の)元栓を閉めてくれたりとか。水がジャージャー溢れて流れていたものですから。隣に夫の両親とお姉さんもいて。みんなで外に出てとりあえず車の中で避難をして。

語り13：3軒、隣近所の弟やお姉さんとお婆ちゃん達と一緒に避難しようってことで避難することになったんです。(家が倒れて車を出すことができず)姉のところの甥っ子が隣町なので途中まで迎えに来てくれて。(中略)その後3日間くらい小学校に避難した後、おばあちゃんたちと家で半年間くらい一緒に過ごしました。おばあちゃんたちはその後仮設住宅の方につられたんですけども、半年間は一緒に4人でずっと生活をしたような状態です。

語り14：3軒でなんとか力を合わせて。水道も水が出ないし。3軒で知恵を出し合って、1か月間過ごしました。雨水を溜めたりとか。今までに味わったことないような色んなことをしながら、凄いだと思います。

語り15：食事もどんなふうにして手に入れたか分かりません。みんなで分けてって感じですね。近所の人「水はあるね～?」とか「缶詰が手に入ったよ～」とか言って持ってきてくださったのを食べたんですけど、味もなんかしなかったような気がします。そういう状態でした。地震直後はですね。

語り16：(被災後)「さあ、どうしましょうか」っていうことになって。隣の家の下におっきい鉄骨の小屋があるから、じゃあ当面ははそこでご飯の用意をして。ここ(近所の)4、5軒分は良いかなっていうところで。まあ、冷蔵庫の中にある食材で食事をしましたね。

語り17：(消防団が)1番に回ってきてくれたんですね。一軒一軒、「大丈夫ですか～、大丈夫ですか～」ってね。夜9時半にあれ(前震)があって、10時くらいには一軒一軒確認して回ってましたよ。

語り18：あの時、この地区は割と消防団とかがしっかりしていて、食事の面は良かったですね。

語り19：(消防団があったことで)恵まれてました。はじめのうちはパン1つとおにぎり1つだったん

ですけど、あとは皆さん（消防団）がここで炊き出しをしてくれたんですよ。それで助かりました。

語り20：（消防団のおかげで）みんなご飯もほかほか食べられるし。カレーとかナポリタンとか。子どもたちってというのは麺類とかナポリタンとか好きですよ。そういう面で、他の被災地よりも消防団の方のおかげで救われたんじゃないかなって思いがあります。

### ③SCの素地となった地区活動や宮ごもり

本研究の主眼であるSCについて、この地区でどのような基盤となる素地があったのか、いくつかの語りから明らかになった。例えば、日常的に行われてきた地区の区役（語り21）、この地区にある消防団との関係（語り22）、神社を中心とした「宮ごもり」の伝統とその組織との関係にも密接であることがうかがえる（語り23）。

また、そういったものによって形成されてきた「SCの素地」が、先に示した「②被災直後の地域における互助」を生み、後述する「④良質なSCへと発展するグループ活動」に影響を与えていたことが語られた。

語り21：元々、ここの地域は農業地域で、ずっとお爺ちゃんお婆ちゃんたちの世代から住んでる人が多くて。年中行事で区役があったり、お祭りがあったり、清掃・掃除があったりとか。「1軒から1人ずつ出でみんなでやろう」みたいな。そういうのがほとんど年中行事の中に組み込まれているものだから。みんなある程度顔は知ってるわけですね。そういう意味では「昔からの行事ってというのはこういう時にすごく役に立つんだ」っていうことをWグループのリーダーが言ってますね。

語り22：〇〇さん（Wグループのリーダー）が「若いときは面倒くさかった」って。「消防団の活動でもなんでも、「早くなくなれ」って思ってたけど、こういう緊急事態が生じた時にこそ、昔の人の知恵でそれをずっと繋げて持ってきてきたことがよく分かった」ってことをいつもスタディーツアーで仰ってます。本当にそうなんだなって思います。

語り23：やっぱり、みんな一人ひとりがお宮を大事だって思ってるんです。幼い時からここで遊んで、正月はお宮参りして。お祭りの時は甘酒持って、煮物して、お参りしたとか。それから（この地区に）若いお嫁さんが来た時は、班の組の中で見知ってもらうためのそういう活動みたいなのも意味があるみたいなんですよ。ここでお宮参り、「宮ごもり」っていうんですけどね。「どこそこのお嫁さんだよ。新しく来たお嫁さんだよ」って、見知るための機会があるんですよ。

### ④良質なSCへと発展するグループ活動

先に示したような「SCの素地」を基に、後に互助サークルQのリーダーとなる人物の住民に対する問いかけとアプローチによって、グループの立ち上げに関する動きが始まっている（語り24、25）。その後、この自然発生的なグループは住民自身の手によって、グループ活動のための模索と展開がなされている（語り26～30）。また、リーダーとなった人物との良好な関係性が描かれたグループインタビューの結果となっている（語り31～33）。

語り24：（後に互助サークルQのリーダーになる人が）この異常に変わった風景を見て、「これからこんな風に、親しくしていた人たちとも、疎遠になったりするというのは残念だな」って思われたみたい。（中略）「この状態で皆がバラバラになって。なんか顔の表情もなんか変わったよね」って。「なんか皆しらーっとなってうつろだよ」って（お互いに言っていた）。

語り25：「何かしようよ」って一言だったんですね。そのリーダーが「何かやろう」って。それ



で、「何かって。何をするの？こんな状態の時に」って言ったら、「いや、まだそれはちょっとまだ分からないけど、でもこのままじゃいかん。何かしよう」って言われて。

語り26：（最初は）7名くらいだったですかね。親しかった人達に声を掛けて、ある一定の場所に寄っていただいて。「このままじゃだめだよ」って。「皆がバラバラになる」って。「だから何かをしよう。みんな意見を出してみよう」って言われて。そしてその7人の方からいろんな意見が出たんです。

語り27：「炊き出しをしよう」とか「ごはんのおかずを作ろう」とか、とかいろいろ出ました。その中で、ここは元々農家の方が多いから、「お米は自分とこで持つてよ」って。（中略）検討している矢先に、別の地域で食中毒が発生したんですね。炊き出しをやって。（中略）「これはやめたほうがいいね」っていうことになって。

語り28：「他に何かある？」ってなった時に、（互助サークルQの）リーダーが元々学校の先生で、人をまとめて指導することがとても長けていらっしゃったんですね。レクリエーションのダンス教室を何か所か持ってらっしゃって。それで「あんた出番よ」て私が言ったんです。それで、私は婦人服の仕立てを職業として生きてきた人間だったから、その針仕事とか小物づくりをする材料は、家の中に残ってたんですね。（中略）これを2つコラボでしましょうということで、もう1回、（7人のメンバーを）回ったんです。「こういう計画ができたんだけど」って言って。

語り29：最初はみんな針仕事が上手な人ばかりじゃなくて。（中略）なんとかできたんです。こういうのが（実物を見せる）。そしたら、1人の方が「とっても便利だ。畑仕事の時にバイクのカギや小銭入れたりとか。保険証入れたり。これ手放せないよね」って仰って。それから私も勇気が出てきて、「じゃあ、次は何しようか」って。それがズンズン広がっていったんです。

語り30：（互助サークルQの）リーダーと一緒に歌ったり踊ったり。色々情報交換して、「体も健康でなくちゃいけない、体と心が健康でなくちゃいけないよ」っていうことで、一緒にダンスして、洋裁してって感じで（グループが）出来上がっていったんですね。

語り31：（リーダーについて）今まではですね、「挨拶をちょこっと」くらいだったんです。本当に。「派手なおばさんだなあ」位で（笑い）。だけどですね、リーダーとして頑張ってくれたから今があるからですね。感謝してます。そして、皆さんが優しいからですね。

語り32：（グループのリーダーは）ここに対するしがらみがなかったんですよ。普通はなんとなく人間関係が地域の中でギクシャクしてる時に、「あの人がするなら、私はしない」とかっていう問題が出てくるんです。でも、彼女（グループのリーダー）は（10数年前に）外から来た人だったし、まとめるのが上手な人だったからすんなりみんながついていったんですね。

語り33：ちょっとしたリーダーの方がいらっしゃって、それをみんなが協力していく。まあ、ほんともう（かけるエネルギーは）全然微々たるものっていう。誰もそんなに（背負いこまない）っていうか。

#### ⑤受容的かつ自由な雰囲気が生み出す好循環

グループ活動が始まった当初は、共通した体験である地震を通じて感じたことなどを素直に表出しあい、そ

れを相互に受け止め、承認しあっている（語り34）。「自分だけではなかった」という表現に見られるように、被災者であるグループ参加者たちが、内に秘めてきた体験を語り下ろす機会を得られていた。また、地区外の者の参加であっても「良いよ！」や「どうぞ」という声掛けによって受け入れがなされていた（語り35、36）。このグループの雰囲気についての語りをうかがう際、調査対象者の多くが笑顔で受け答えをし、ポジティブな感情表出を行っていた（語り39～42）。さらに、この活動は地区の別組織とのコラボレーションにより、被災地以外との広域的な連携も行っていた（語り37、38）。

語り34：みんなで寄っているんな地震の話とかをしながら。「あなたのところもそうだったの」、「うちもこうだったよ」、「あーだったよ」って。災害の脅威を知った怖さとかこれから先の事とかを喋りながら。お喋りってとっても大事。「自分だけじゃない」、「彼女もそんな辛い思いをしたんだ」、「彼女も病気がちょっと悪化してるんだ」って、そういう情報交換できる仲になったんですね。

語り35：こういう繋がりがあるって聞いたから。何も考えないで「私も参加させてください」って言って。「どうぞどうぞ」って言われたから参加したんですけど。後で考えたら、隣の地区からこちらに参加して良かったんだろうかって思ったんですけど。おかげで楽しくてですね。ここに「行ってもいいね？」ってメンバーに聞きました。「あたしも参加していいんだろうか」って。「いやあ、良いよ！」って言われて。

語り36：広報誌か何かを配ってこられたんですよ。それで「〇〇さん、私なんかも互助サークルQに入っているの？」って聞いたら、「いいよ！おいで、おいで！」って言ってもらって。本当に入って良かったって思います。なんか、本当にここに来て笑うもんね。

語り37：〇〇さんの息子さんがWグループっていうのを立ち上げられて。「スタディーツアー」っていうのを地震の年（2016年）の10月から始められたんですね。その時の最初のお客様が東京の会社だったんです。そこが何かを熊本に支援したいということで、インターネットを通じてコンタクトをとってきて。「やろう」っていうことで、東京の方々が来てくれたんですよ。その時に、いろんな話をして、スクリーンの中に地震直後の映像とかいろんなものを映しながら、グラフとかを。それから消防団の活動とかお話なんかを流して。

語り38：会社の幹部の方がいっぱい見えてて、「これはすごい」と。「これを是非、東京でやってくれ」ということで、翌年（2017年）の4月に東京の本社に行きました。それからずっと、毎年春と秋に2回、会社の方々がスタディーツアーでここに来て、支援という形で私たちの作ったポーチとか巾着を買ってくださっています。

語り39：本当に心が笑顔にならないと復興って始まらないと思います。それは本当に体験してそう思います。

語り40：笑って色んな情報交換をして元気になります。ましてや、Wグループのスタディーツアーでポーチが売れたら元気の源！（笑いが溢れる）。

語り41：主人が（互助サークルQでポーチづくりしている）私を見て笑うんですね。「あなたの元気の源はポーチだ」って。おかげ様で、私だけかもしれないけど、心が笑顔になると主人にも優しくなるし（笑い）。周りの人たちにもちょっとずつ幸せのお裾分けが行くから、水の波紋のように「ポチャ



ン」と愛が来れば、その愛はポーチを買ってくれた人が愛を落としてくれたんだって。それが波及効果で行くと思います。それがみんなに重なっていくと、地域も全部元気になるっていうのが私の思いです。

語り42：互助サークルQに入らせて頂いて、いろんな方と話が出来て。なんか「生きてる」っていう感じを持てているんです。だから本当に感謝でいっぱいです。(中略)何かあったら、(メンバーが)声を掛けてくれるんですよ。家で一人で留守番役でしょ。だけど、なんやかんや、「今度はどうした。こうした」とか。お世話される方(リーダー)がいらっしゃる(ことでの安心感)。これ(手帳)を書いています。「今日は何があるか」なんてね。だから嬉しいです。皆さん本当に、みんなをよくしてくれるから。ありがたいです。

### ⑥グループの利益を地域の利益へつなげる

グループ活動で得られた利益は、SCの素地ともなった地域の神社の復興費用やほかの被災地に対する「支援返し」といった形で還元していた(語り43、44)。さらに、グループ内だけでこういった取り組みを行うのではなく、夏祭り等を通じて地域を巻き込んで関係形成を行い(広げ)ながら取り組んでいることが分かった(語り45)。

語り43：(互助サークルQの)利益の一部は神社の復興に向けて納めるということで。今年もつい先日、8万円ですけど、互助サークルQが稼いだ分のお金をP地区の会計さんの方に(お渡ししました)。

語り44：2万円はここが被災した時からずっと広島から独自で支援に入ってくださった方のために。今度は広島が集中豪雨で被災したので。(中略)「今度は逆に何かをしようよ」っていう投げかけで。「じゃあ(互助サークルQから)2万円をその方に贈ろう」ということで。そしてここ(P地区)で夏祭りをしたときに寄付金を募って、その寄付金プラス互助サークルQの2万円ということで。支援返しということにしました。色んなことでみんなの頑張りが少しずつ少しずつお互いのつながりに広がっていったということが私たちの喜びでもあります。

語り45：自分たちの稼ぎだけじゃなくて、この地域にもそうだし、色んな形で助けたり助けられたりの微々たるものですけど。でも、なんか共有できてるし。良い繋がりになったなと思います。コミュニケーションってすごく大事だと思っていました。

## 8. 考察

改めて、本研究の目的は、被災地域における高齢者の健康に対し地域のSCのあり方がどのように影響しているのかについて地域事例から検証することであった。結果として、このP地区では従来から存在した「SCの素地」によって新しい良質なSCが生まれ、有効に機能し、中長期的には高齢者の健康(特に精神的な安定や生きがいの創出)に寄与したことが明らかになった。

まず、このP地区では、神社を中心とした伝統的な「宮ごもり」によって互助機能が形成されてきたことを背景に、区役や消防団等が充実していた。現代社会において、一見負担増加にも見える社会活動が、結果として大規模災害時における有機的な連携を生みだし、顔の見える関係(繋がり)が有効に機能した。これが、「SCの素地」ともなり様々な波及効果を生み出している。

フェーズ0～1においては、この「SCの素地」が生命の危機における被災家屋からの救出や安否確認へとつながっている。特にお互いのこと(例：家族構成や要支援者の存在)を理解しあっていたことが効果的に作用



していた。さらに、高齢者の食生活の維持などに対しては、相互扶助機能を活かした取り組み（近所の分まで考えた食事作り）によって、避難所などでの公的な支援が始まるまで支え合っていた。一方、当然であるが、発災後比較的早い時期においては身体的な外傷が発生したり、慢性的な疾患に対する継続的なケアの不足、短期的に生じたメンタルヘルス上の課題まではSCで対処することは困難であったことが分かる。特に高齢者においてはいわゆる「フレイル」<sup>\*4</sup>が対象者や家族に散見された。

しかし、中長期的にはこの地域における「SCの素地」を基盤とした互助サークル活動が立ち上がることによって良質なSCが生まれ、様相の変化を生み出した。互助サークルQが立ち上がるプロセスにおいてはSCの波及効果によるリーダーシップと参加した高齢者によるフォローシップをもとに、決して専門的ではないがグループワークの理想的な展開が推し進められていた。例えば、目的を持ったグループ活動の展開、グループメンバーや状況のアセスメント（個人の持つ強み：ストレングスの評価、リスクアセスメント）などが挙げられる。さらに活動のプランニング（活動の見える化によるメンバーへのフィードバック）、活動の実施という展開が行われていた。

この互助サークルQの取り組みについては、他者を排除する雰囲気は見られない。受容的雰囲気や自由な雰囲気（責任や義務といった縛りの低さ）がこういった一連の活動を加速させたといえる。そして、このグループ活動を通じてメンバー相互が生きがいや精神的な安定を得ることができ、結果として「笑い」や「笑顔」による好循環（グループ内外への波及効果）を生み出していると考えられる。

一方、課題も見られる。リーダーについての語りの中で、「(中略)「あの人がするなら、私はしない」とかっていう問題が出てくるんです」に表現されたように、実体としてこの地区における「SCの素地」が常に良い循環にのみ作用したわけではなかった。この地区の事例では、偶然にもリーダーシップを発揮した人物がまさに「しがらみのない」存在だったことによって、結果的に良質なSCを生み出したと言える可能性がある。P地区の長い歴史の中で育まれた「微妙な」人間関係は新たなSCに影響を与える。そして、そのSCを生み出す際、構成員やリーダーのもつ背景がSCの質を大きく左右する可能性があることを示したと言えよう。これについては今後グループに参加していない住民の語りについて検証する必要もある。

さて、この良質なSCは参加したメンバーに様々な利益をもたらしたただけではなかった。むしろ、その利益を「SCの素地」となった地域（ここでは神社の復興費用や支援返しなど）に還元することで公益性が生まれ、参加者の意欲の向上や生きがいの創出に寄与している。さらに、P地区内の他のグループとの連携（コラボレーション）によって、被災地以外との繋がりを生み出している。そのことがP地区に足を運ぶ外部の人的・物的資源を加速し、新たな循環を生み出すことになっている。

また、今回の調査対象者はすべて女性であった点も特徴的である。それは逆の視点から考えれば、男性高齢者のSCへの関与が少なく、潜在的ニーズや課題が明らかにされていないということもできる。フィールドワークを通じて得られた知見（特に事例研究や質的研究）に量的研究を重ねるなどのトライアングレーション、あるいは他地域との比較などによる精査が本研究の課題として残っている。

## 謝辞

本研究は、熊本地震において被災しつつも地域の互助活動を組織化し、運営を続けてこられた調査対象者12名のインタビューに対する協力があって生み出されたものである。心より御礼を申し上げたい。

## 付記

本研究は、日本学術振興会科学研究費助成（基盤C・課題番号18K10632：平成30～令和3年度）「熊本地震後の高齢者の健康とソーシャル・キャピタルのあり方に関する研究」の一部である。また、第8回日本公衆衛生看護学会（2020年1月）において、「熊本地震前後の個人や地域の健康とソーシャル・キャピタルの実態と課題」と題し発表した内容の一部に考察を加えたものである。

## 【注】

- ※1 一般的に「災害弱者」と呼ばれることもあるが、ここでは防災行政上の用語として「要配慮者」とした。「要配慮者」は災害対策基本法第8条第15項に位置付けられており、「高齢者、障害者、乳幼児その他の特に配慮を要する者」と規定されている。
- ※2 ソーシャル・キャピタル（SC）とは、Robert D.Putnamが1993年に著書『Making Democracy Work』（邦訳『哲学する民主主義—伝統と改革の市民的構造』）のなかで、「人々の協調行動を活発にすることによって社会の効率性を高めることのできる、「信頼」「規範」「ネットワーク」といった社会組織の特徴」と示しているものである。
- ※3 2016年4月に発生した熊本地震の被害状況（熊本県災害警戒本部：11月8日）は、人的被害（死者140人、重軽傷者2,516人）、住家被害（全壊8,302棟、半壊31,219棟、一部破損134,985棟）となっている（「平成28（2016）年熊本地震等に係る被害状況について」より）。また、避難所数及び避難者数のピーク（2016年4月17日0930時点）では、避難所855か所が開設され、183,882人の住民が避難した。さらに、熊本地震は、頻回な地震への恐怖などから指定避難所にかず、損壊した自宅や自宅周辺の空き地などで車中泊する高齢者は多く、支援が不十分だったと考えられ、問題が明らかになりにくい特徴があった。このような甚大な被害の復旧復興は数年間が必要とされており、発災当時からの時間の経過とともに、住民の健康課題や生活支援に関する課題も変化している。
- ※4 日本老年医学会はフレイルに関するステートメントを出している。そこでは「Frailty」について、「高齢期に生理的予備能が低下することでストレスに対する脆弱性が亢進し、生活機能障害、要介護状態、死亡などの転帰に陥りやすい状態で、筋力の低下により動作の俊敏性が失われて転倒しやすくなるような身体的問題のみならず、認知機能障害やうつなどの精神・心理的問題、独居や経済的困窮などの社会的問題を含む概念である」としている。これまで、「虚弱」と表現されることが多かったが、こういった取り組みによって近年では「フレイル」と表現されるようになってきている。

## 【引用文献】

- 1) 渡邊聡「被災地域における復興プロセスとソーシャル・キャピタルの効果：東日本大震災後の岩手県を事例に」『鈴鹿大学紀要』第22巻, p93-106, 2016.
- 2) D・P・アルドリッチ, (石田祐・藤澤由和訳)『災害復興におけるソーシャル・キャピタルの役割とは何か - 地域再建とレジリエンス -』ミネルヴァ書房, 2015.
- 3) 益城町「震度7×2からの復興（2019.3.18時点版）」[https://www.town.mashiki.lg.jp/kiji0032076/3\\_2076\\_3082\\_up\\_xyjvzy05.pdf](https://www.town.mashiki.lg.jp/kiji0032076/3_2076_3082_up_xyjvzy05.pdf)

## 【参考文献】

- 佐藤郁哉『フィールドワークの技法—問いを育てる、仮説をきたえる—』新曜社, 2002.
- 益城町『平成28年熊本地震益城町震災記録誌』2020. [https://www.town.mashiki.lg.jp/kiji0033823/3\\_3823\\_5427\\_up\\_jihuen7n.pdf](https://www.town.mashiki.lg.jp/kiji0033823/3_3823_5427_up_jihuen7n.pdf)
- Uwe Flick (原著), 小田博志, 春日常, 山本則子, 宮地尚子 (翻訳)『質的研究入門—「人間の科学」のための方法論』春秋社, 2002.

# A Study on Health of the Elderly and the State of Social Capital in a Large-scale Disaster :A Case Study of Mashiki Town P Area in Kumamoto Earthquake

Takuya CHAYAMICHI<sup>1)</sup> Kumiko FUKUMOTO<sup>2)</sup> Kumiko FUKUDA<sup>2)</sup>

1) The International University of Kagoshima

2) Kyushu University of Nursing and Social Welfare

This study examines how the social capital (SC) existing in the area contributed to the health of the residents (Especially the elderly) with respect to the health damage caused by a large-scale disaster. We conducted fieldwork in the P district of Mashiki Town, Kamimashiki District, Kumamoto Prefecture, where the Kumamoto Earthquake caused a great deal of damage, and conducted a group interview with the Mutual support Circle members made by the affected elderly people. As a result of the analysis, the following six points were arranged. (1) Health condition deteriorates after the disaster, (2) Mutual support based on the SC foundation immediately after the disaster, (3) District activities and “Miyagomori” that became the foundation of SC, (4) Group activities that develop into high-quality SC, (5) A virtuous cycle created by an inclusive and free atmosphere, (6) Connecting group profits to local profits. In the P area, a high-quality SC was created and developed by the “SC foundation”. Although the health condition of the elderly had declined temporarily, a virtuous cycle was revealed in which active mutual support activities were carried out, complemented by the mental stability and purpose of life produced by high-quality SC.

**Key Words:** Social Capital, Group interview, Mutual support, Kumamoto Earthquake